

# カイとティム

影の国のぼろけん

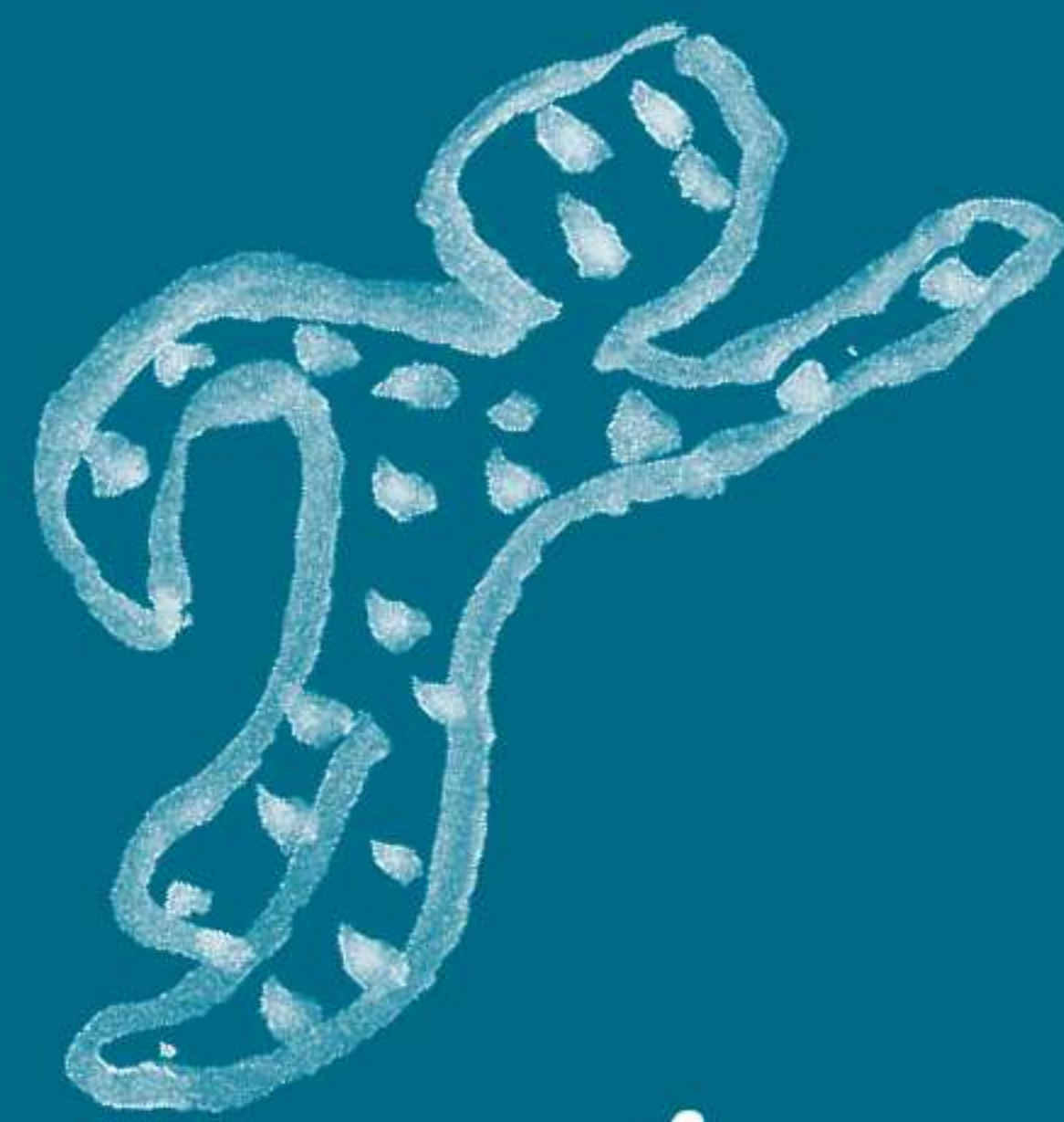
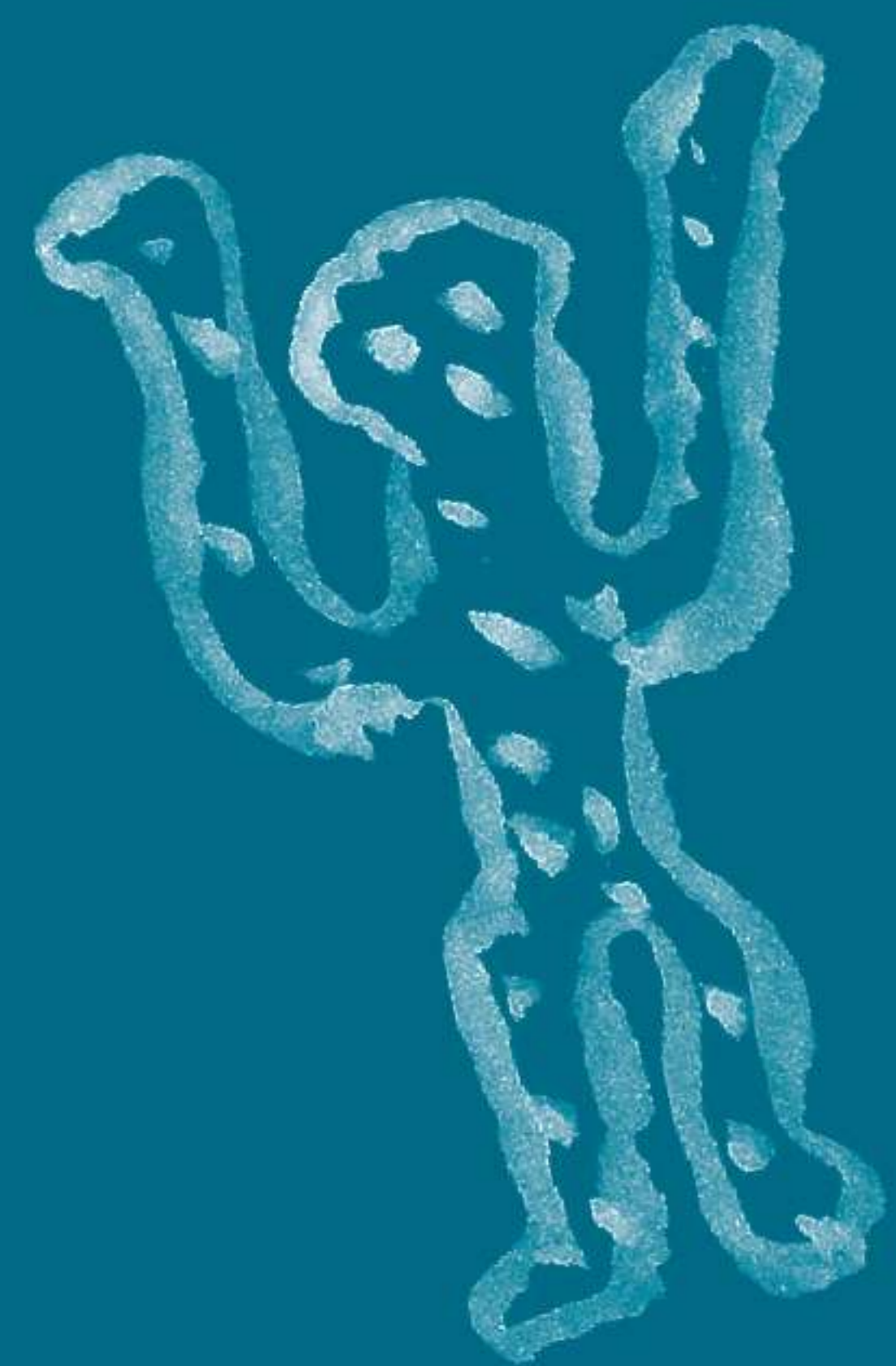
石井睦美 作

ささめやゆき 絵

AliceKan







3

カイとタイム、ふたたび  
よんごぼうけんへ

049

4

泣のながで落としものを  
さがすということは

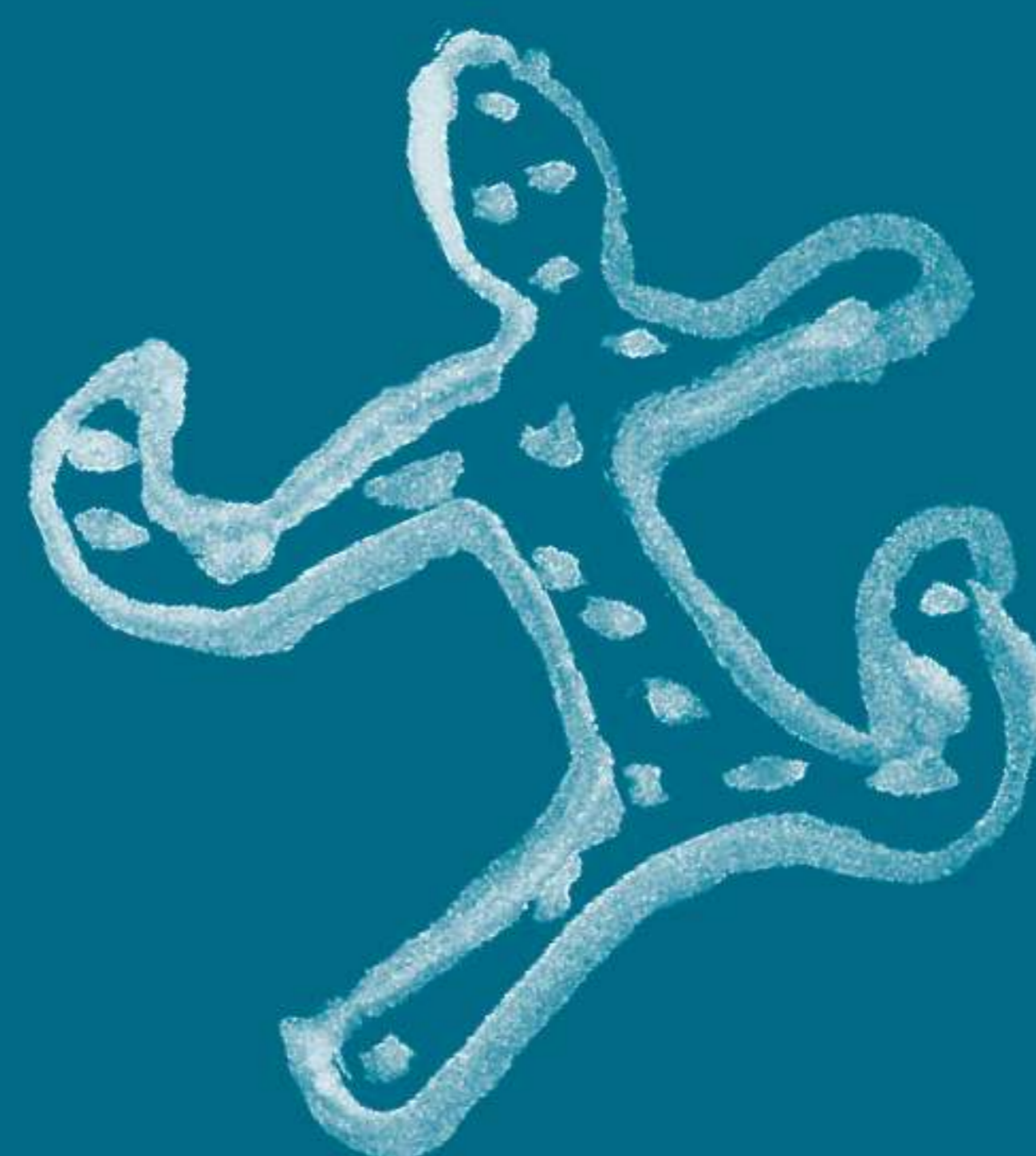
067



2

とんでももない  
落としもの

037



1

おっ、っ、っ、っ  
妖精タイム  
ふたたび  
あらわれる

017

5

行く先は、  
影の国！？

085

Ajicekan



お話がはじまるまえのとてもみじかいお話

みなさんは、ちょっと前か、もしかするとずいぶん前に、カイという男の子とタイムというおてつだい妖精のお話を読んだことがあったでしょうか。

そのお話は、六さいになったカイくんが、ひとりでねむることになった夜からはじまりました。

ねむれないでいるカイくんの前にとつぜん、タイムがあらわれ、その夜から、カイくんはタイムといっしょに、ジュラ紀に行ってイグアノドンかせなかにのったり、うれしい電車で地球の外まで出かけたりと、それはすごいぼうけんをしたのです。

それから三年がたって、カイくんは九さい。小学三年生になりました。

「うーん」

おや、カイくんの部屋から、カイくんのうなるような声が聞こえてきましたよ。

いつもならとくにねむっている時間です。なにかこわい夢でも見て、うなされているのでしょうか。それとも、クイズの答えがわからなくて、うなっているのでしょうか。

部屋には小さなあかりがひとつ、ついているだけです。

「あのさあ、ティラ2号」

ベッドの上にすわりこんだカイくんが話しかけたのは、てのひらにちょ





こんと乗るくらいのテイラノサウルスのロボットでした。

小さいけれど、高性能のおもちゃです。

ほら、カイくんのよびかけにこたえて、

「グオーグオー」

と、テイラ2号が声をあげました。

そればかりか、口からはシューシューと赤いほのおもはきだしました。

ほのおはもちろんレーザービームです。

ああ、カッケー！

カイくんは、うっとり。

そのほのおで、部屋のなかは、あかるくなりました。

「テイラ2号は知らないと思うんだけど、ぼくさあ、昔、妖精とあそんだ……かもしれないんだ」

「グオーグオー」





「それとも夢だったのかなあ。  
あつ、なんでこんな話をしてるか  
というと、それはね……」

カイくんがそこまで話したとき  
でした。カイくんの部屋のドアが  
すこしあいて、ろうかのあかりが  
すうっと部屋にはいつてきました。

「カイ、こんな時間に、だれか、  
あそびに来ているの？」

ドアのすきまから顔だけだして、  
おかあさんが聞きました。

「ううん。だれも来てないよ、  
どうして？」

「話し声が聞こえたからよ」

うそ！

ドキっとして、カイくんは思わずテイラ2号のボタンをおしてしまいま  
した。

「グオーグオー」

テイラ2号が声をあげ、口からまた、ほのおがふきでました。

「話し相手はテイラだったのね」

テイラというのは、カイくんが六さいのおたんじょうびのおいわいに、  
おじいちゃんとおばあちゃんからプレゼントされた、きょうりゅうのぬい  
ぐるみです。おかあさんが、どちらもテイラとよぶので、そのたびに、カ  
イクんはていせいをします。

「テイラじゃないよ。テイラ2号だよ。テイラはちびきょうりゅうだか  
らもうねてるんだ。こっちはテイラ2号」



カイくんがティラ2号ごうをかかげてみせると、かべにティラ2号ごうの影かげが大おおきくうつりました。

「あーっ！ 見て見て！ ティラ2号ごう、ほんもののきょうりゆうみたい。カッキー！」  
すると――。

「カイ！」

おかあさんがこわい声こえで、カイくんの名前なまえをよびました。

「カッキーってなんですか。そんな言葉ことばづかいはやめなさいって、いつも言いってるでしょ」

そう言いいながら、おかあさんはずんずんカイくんちかに近づちかいで、

「ねる時間じかんはとっくに過すぎているのよ。さあ、ちゃんとおふとんにはいって」

と、カイくんをふとんのなかにおしこみました。

「もう、ティラがおちているじゃない」  
「い」

ゆかにころがっていたティラ――ぬいぐるみのティラです――をおかあさんがひろいあげて、カイくんとなりのとなりにおこうとしました。

「あ、ティラはいいんだよ」

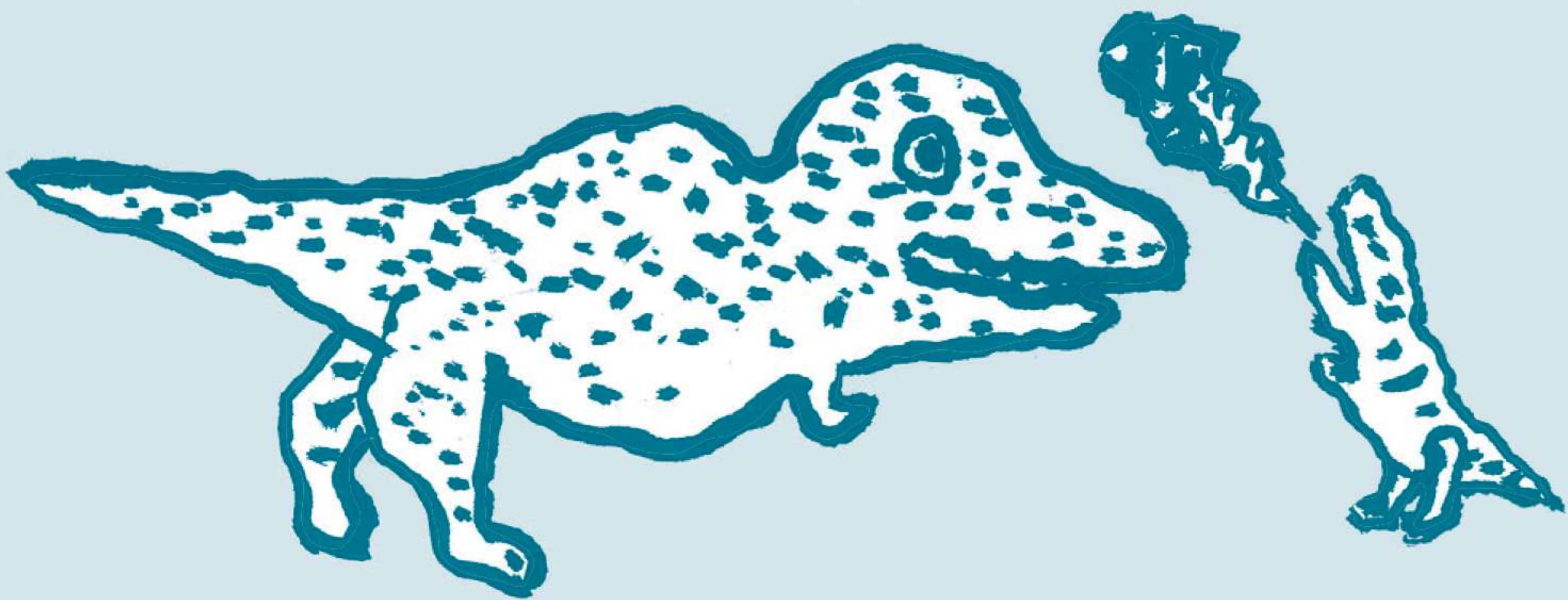
と、カイくんはあわてて言いいました。

「どうして？」

「だって、ぼくはもう、ぬいぐるみとはいっしょにねないよ」

「あら！ そっちのティラばかりかわいがっていたら、こっちのティラが

AliceKan





さびしがるんじゃない？」

「だから、ティラ2号だってば。それでもって、ティラはぬいぐるみだからさびしくなったりしないんだ」

「理屈なんか言っていないで、はやくねなさい！ ねないで、またロボットくんであそんでいたら、とりあげてしまいますよ」

やんなっちゃう。どうしてって、おかあさんが聞くからちゃんと理由を話したのに。おかあさんてば、いつも理由を言いなさいって言うくせに、ぼくが理由を言くと、理屈を言うんじゃないやありませんって言うんだ。

カイくんはこころのなかでばやきました。

カイくんのそんな気持ちはおかあさんには通じません。ひろいあげたティラを、おかあさんはそっと、本棚の恐竜辞典のすぐ前におきました。そこがティラの場所なのを、ちゃんと知っているのです。カイくんが、このごろはティラ2号とばかりあそんで、あんなに好きだったティラとちっ

ともあそぼうとしないことも。

たしかに、カイくんはいま、ティラ2号に夢中です。けれど、ティラのことがどうでもいいなんて思っているわけではありません。ちびかいじゅうのティラは、いまではカイくんにとってはかわいいおとうとみたいな存在になりました。

それでおにいちゃんのカイクンとしては、おとうとはかわいいけど、おにいちゃんたちのあそびにいれるのはちょっとむりなんだよ、そんなふう

に思っているのです。  
「さ、おやすみなさい、カイ」  
と、おかあさんが言いました。

「おやすみ」

カイくんが返事をする、おかあさんは部屋を出ていきました。カイくんのこのときの言いかたときたら、いかにもいやいやあいさつしていると



いう感じかんでした。けれども、「おやすみ」は「おやすみ」です。

そして、あのときもそうだったように、ほんとうのお話はなしは、カイくんが「おやすみ」を言いったとたんにはじまるのです。

AliceKan